

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	宇都宮大学共同教育学部附属小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	発信！ICT×保護者参加型生活科授業の創造

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1 活動に至る経緯

直接体験を重視する生活科の授業において、ICTを用いた授業実践例が少ないのが実情である。タブレット端末を低学年児童に操作させることに対する不安感から、まだまだ使用を躊躇する教員も多い。また、低学年特有の教科である生活科において欠かせないことが家庭との連携である。学校と家庭との分断が叫ばれている昨今、ICTを用いた保護者参加型授業実践についても行っていく。ICTを駆使した授業実践や保護者参加型授業実践を通して、子どもの資質能力を育成するとともに、得られた成果をセミナーで発信していきたいと考えた。

2 活動・研究の目的(ねらい)

ICTや保護者参加型の生活科授業を通して、子どもの気付きの質の高まりを目指し、自立し生活を豊かにしていく子どもの資質能力の育成を目指す。また、得られた成果を発信する授業づくりセミナーを開催し、教職員の資質能力の向上といった地域貢献にも寄与していく。

3 活動内容

(1)授業実践

①令和5年4月 「1年生〇〇〇大作せん」 (Zoomアプリを効果的に活用した事例)

2年生が1年生のことを考え、遊びの計画を立てる際にZoomアプリを効果的に活用した。2年生の子どもたちは1年生と1度交流を行い、もっと1年生と関わりたいという思いを膨らませていた。次の交流の際には、自分たちの思いだけでなく、1年生のことを考える必要があったり、1年生にもやりたいことがあったりすることに気付くことができた。その際、1年生にも質問や1回目の交流の感想を聞いてみたいという声が生まれたタイミングで、Zoomアプリを介して、交流を行った。



②令和5年5～7月 「すごい！いいね！はっけん ふぞくタウン」

(QRコードやロイロノートを利用した保護者参加型の事例)

今回の単元では、附属小周辺に3回探検を行った。探検の際は、直接お店の人と関わってインタビューをしたり、直接実物に触れたりしてお店などをはじめとする附属小の周辺に愛着をもってほしいと考えた。そこで、子どもには直接体験を重視してほしいと考え、保護者の方にロイロノートで動画や写真の記録をお願いし、それらを用いて振り返りや伝え合いで活用した。さらに附属小周辺に住む保護者の方をお願いし、クイズでお店や人の紹介を行ってもらった。QRコードを読み取ると、問題が流れるようになっており、子どもたちは、「この病院通ったことある！本当に優しい人だよ」というような声もあがった。20件ほどのお店や施設、働く人の紹介があった。



③令和5年10～11月 「ふぞく小ウォーターランド」

(ICT を効果的に活用した事例)

単元導入では、幼稚園でどのようなことをしてきたか想起できるよう、子どもの思いに応じて写真を見ることのできる場を設定した。水を使った遊びをつくっていく際は、友達の遊びを試したり、動画を見たりすることのできる場や、お試して遊んでくれる友達を募集することのできる場など、違う遊びをする子ども同士で互いの活動が見える環境を設定することで、友達の気付きや思考に触れながら活動できるようにした。単元終末では、考えた遊びを動画で撮影し、QRコードでいつでも動画を見返すことのできるウォーターランドマップをつくり、みんなで動画を共有した。



④令和5年1～2月 「おもいっきりカーニバル」

(保護者参加型の遊びづくりの事例)

おもいっきりカーニバルでは、子どもの思いを生かし、保護者にもお客さんとして参加してもらった。その際、子どもたちのお店にはQRコードを用意した。このQRコードは、保護者の方がスマートフォンで読み取ることで、子どもたちのお店で遊んだ感想をその場で入力することのできるフォームが表示されるようになっている。単元終末では、おうちの人からの感想を読んで、カーニバルを振り返った。



⑤令和6年 1月 「シン 自分たんけん」

(ロイロノートを効果的に活用した事例)

3年生への進級を控えた2年生の子どもたちが、実際に3年生の授業を見学したりインタビューをしたりしながら、3年生での楽しみやなりたい3年生像を考えた。3年生の授業を見学に行った際、ロイロノートで写真や動画を撮り記録をした。それらを用いて友達にどんなことを伝えるか考えた。



(2)授業づくりセミナーの開催

6、8、9、10、12、1、2、3月に生活科授業づくりセミナーをオンラインで開催した。SNSを利用し広く周知したり、オンライン開催としたため、全国各地からの参加が見られた。毎回セミナー後にアンケート調査を行った。参加者からは満足度の高い回答が数多く寄せられた。この結果からも、地域貢献に寄与できたと考える。参加者の感想を下記に一部紹介する。

・ 印象に残ったのは、保護者の方とのつながりです。低学年の子どもたちは特に保護者の方に見てもらいたいという思いが強いので、とても参考になりました。また、うちの学校は地域とのつながりも強いので、地域ボランティアの方たちに協力してもらいたいとも思いました。実体験を大切にしつつ、ICTも活用していきたいです。

・ 生活科の授業に難しさを感じていたので、すごく勉強になりました。子どもたちにとっての必然性、子供の思いを大切にすることがどれだけ重要かということ、改めて実感しました。子どもたちの思いから広がる活動は、こちらの想像をはるかに超えてくるので、子どもってすごいと感心したことがあります。まさに、遊びの天才です。今後も生活科について学び、私自身も楽しみながら、生活科の授業を実践できるようにしていきたいと思えます。

4 子どもたちへの効果(成果・課題)

ICTの活用によって、気付きの質の高まりについて新たな可能性も本実践を通して見出すことができた。例えば、自分の活動をタブレット端末を用いて何度も見返すことや、振り返りに関して自分を客観視して捉えることが示唆できた。また、動画や写真を用いて伝え合いを行うことで、自分と友達の気付きを関連付け、気付きの質を高めることにもつながった。一方で、生活科授業においては、直接体験は欠かせないものであることを実践を通じて、改めて感じる事ができた。どの授業においても、子どもたちは五感を存分に発揮し対象に働きかける姿が見られた。教師によるICTの活用や子どものタブレット端末の活用は子どもの気付きの質の高まりを目指す手段の1つであることを再認識することができた。目の前の子どもたちの思いを大切にしつつ、最適な学びの選択肢の1つとしてICTの活用をこれからも考えていきたい。

